

# 火星

平成二十五年二月号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

孝子さん手術成功  
雨あとの梢に力笹子来る

年の夜の独りなる錠ひびきけり

鶏冠に年の朝のま空あり

垣結うてこの家の待てる初雀

みづうみの蒼をうしろに門礼者

湖の照りを反せり初湯桶

三日月にいろなき色や松の内

火事見ゆる橋の人出となりにけり

酔こんぶの匂ふ子の息寒波来る

全身をもて仰ぎたる寒北斗

# 太白星

冬空へ船名決まる紙吹雪  
初冬の船体に打ちワインの香  
冬晴の梅へ傾るる進水台  
冬鹿の眠たき脚をたたみけり  
水鳥の声真似をれば寄つて来し  
牛飼の踏ん張つて立つ小春かな  
雪起しの雷に薪の火立ち上がる

杉浦典子

浜口高子

魯田は谷内六郎の日差し  
与謝の風に遊子なりけり枯尾花  
雪止めの屋根のまぶしき神迎  
神留守の魚網に貝のうすくれなゐ  
沖の闇迫る千鳥の鳴き交はし  
ダムに沖ありて暮れきし返り花  
綿虫やチンパンジーの眼の澄める

# 火星作品

## 山尾玉藻選

大江山へ背戸開けはなち冬仕度  
八幡坂口夫佐子

水底に藻のなびきぬる風邪心地

落葉掃く土の匂ひの領事館

漣の向き定まらぬ枯柳

黒松の根方明るし古暦

綿虫や海より来たる神もあり  
大山文子

橋立やしぐれにかなふ松のいろ

露寒や灯点すコイン精米所

梟を見返りたまふ阿弥陀仏

火伏札貼り替へし闇十二月

惜命高明先生のながきマフラートろろ吸ふ  
宝塚山本耀子

馬屋奥に差し入る冬日四角なる

泥付きの葱・蕪置ける舟屋口

大江山の鬼の出ぬ間や年木割る  
 母恋の溝蕎麦の水渡りけり  
 初鴨に陸の草ぐさねんごろな  
 神 戸深澤 鱧  
 日の月の入りて花野のつつがなし  
 茶の咲いて坪庭に隅ありにけり  
 一と二の滝音がふ神迎  
 晩秋を燈して燈す母の家  
 いづかたの山も老いけり干蒲団  
 宝 塚蘭定かず子  
 風に舞ふ藁のひかりぬ神の旅  
 水鳥の声のとほきを眩しめる  
 浦西風の睨をゆける婚の箱  
 菓子箱を振れば鈴音冬ごもり  
 登高や若者の息うしろより  
 枚 方川端俊雄  
 冬千穂の峯に初雪鳶舞ひぬ  
 冬耕す神降臨の峯仰ぎ  
 風花や城主の墓にワンカップ

# 選のあとに

山尾 玉藻

ろうか、などと愉しめる。

惜命のながきマフラーとろろ吸ふ

山本 耀子

大江山へ背戸開けはなち冬支度

坂口夫佐子

先の丹後一泊吟行での囑目詠である。大江山の枯が一段と深まる好日、蕪村句碑の前は櫓田がのびやかに広がり、その向う側に何軒かの民家が見えた。こんなに陽光に恵まれる日ならあの家も冬支度に余念がないことだろう、と作者は眩しげに眺めたのであろう。眼前の穏やかな囑目を詠んだ大らかな挨拶句である。

梟を見返りたまふ阿弥陀仏

大山 文子

京都永観堂の本尊阿弥陀立像は右肩越しに振り返つておられる珍しい姿をされている。僧永観の夢の中に立たれ、永観を先導し行道される折に「永観、おそし」とふと後ろを振りむかれた姿に由来すると伝えられている。「みかえり観音」と呼び親しまれているが、なるほどその慈悲深いお顔は何かを優しく諭される表情でもある。掲句、その阿弥陀仏が梟の鳴き声にひよつと振り向かれたと言うユニーク発想であるが、その表情が「おお、お前もか」と一層慈しみの相を深められているように思える。森の哲学者とも福をよぶ鳥とも言われる梟でも、阿弥陀仏に縋つてみたくなることがあるのだ

一読、亡き高明の姿が髣髴として蘇った。「年老いた親父より一日でも長生きできればそれでよい」「六十歳を過ぎるまでよく生き存えたものだ」とは、自分の日頃の不摂生を十分承知していた高明の大変身勝手な口癖。それでいて寒さに弱く「寒い寒い」を連発する大我が儘者。吉野で共に遊んだ折、そんな高明の素を見抜かれた作者は「惜命のながきマフラー」と敢えて言い放ちつつ滋味溢れる眼差しをむけられた。「とろろ吸ふ」が真実切ない。

晩秋を燈して燈す母の家

深澤 鱻

「燈し燈して」のような畳みかけた表現ならば、余裕を与えぬ張り詰めた雰囲気を作りだす効果がある。しかしこの句は「燈して燈す」でありその類ではない。「晩秋を燈して」で一旦軽く切り、読者に先ず辺りが暮れていることを想像させる。そして改めて「燈す」と重ねて、暮色の中で母の家が一層とつぷりと暮れ切っていたことを印象付ける、そんな効果を期待する表現である。

(以下略)

# 恒星巻

山田美恵子

ねずみのこまくら少年の煙草の火  
時雨聴く餃子の髷をたたみつつ  
大江山探してをれば時雨けり  
鬼の棲む山の裾なる冬籠  
ボジョレヌーボアの樽を囲みし乗馬服

松山直美

山本耀子

湯沸しの滾れる音の冬に入る  
長命の名水飲めり神の留守  
綿虫に雨後の日差しのあるにけり  
機関車の蒸気止みけり十三夜  
月光に干し烏賊ひらと返りたる

てんごうに気骨ありけり返り花  
かつ散れる中ひときはの敷紅葉  
おほぶりの芋汁の椀山ねむる  
舟宿にもづくすれる時雨かな  
十二月冷ゆる畳にミサ受けて

村上留美子

米澤光子

灯の入る浜の万屋年詰まる  
石路咲くや舟屋に添ひし道一つ  
磔像に秋日ゆるりと差しませり  
小六月供花に赤色少し足し  
吾がたつる水音のみの寒さかな

外出の鍵のかちりと小春なる  
足袋干して裏に表札ある舟屋  
凹むほど息吹きかけて麦蕎湯かな  
教会の榎櫃の下に寄りにけり  
舟くだり祈るかたちに懐炉抱き

# 獅子座

山尾玉藻推薦

中尾安一

鹿の背に触れ千年の時とどむ  
鹿の絵の道路標識しぐれけり  
この森に果あるべし鹿の声  
人遠くながめて鹿の老いにけり

涼野海音

待たさるることに慣れし草の花  
円周率習ひし頃のいわし雲  
極月の屋上に立つ人の影  
ゆで卵むく指長しクリスマス

田中文治

テーブルにフルーツナイフ冬ぬくし  
ビル街のはやき灯や神農祭  
さざ波に淡路の神の旅立てり  
杣人の渡りし跡か霜の橋

西村節子

汀行けば千鳥の群の先立てり  
草色の馬の糞なり十二月  
湯けむりの向かう墓山片時雨  
猫の尾の冬日払へる舟屋かな

藤田素子

日時計の影は動かず鴉猛る  
点字板の点字に触れし雪螢  
かいつぶりちやつかり鴨に紛れても  
念力に引かれてきたる鴨一羽

佐々木ひろ

林檎剥く母の両の手見て飽かず  
押入れに首つつこめる冬の鴝  
近松忌下駄の鼻緒に湿りあり  
短日の小鉢に母の煮ころがし

今澤淑子

水の面を逆しまに蓮枯れにけり  
特選の頬に朱の差し十二月  
デパ地下の階段に消ゆ裘  
冬灯し留守に慣れ来し新ぼとけ